

病虫害発生予察地区報 第6号

— 地区注意報 —

病虫害名：トマトのタバココナジラミ（バイオタイプQ）

1 情報の内容

令和2年7月、南信地域のトマト栽培施設において、タバココナジラミ（バイオタイプQ）の発生が確認された。施設栽培においては越冬し、今後発生が拡大する恐れがある。

2 対象地域

南信地域のトマト栽培施設

3 根拠

(1) 本年7月、南信地域のトマト栽培施設で、着色不良果（図1）が多数確認された他、ラノーテープが効かないコナジラミが発生した。幼虫を採集し、野菜花き試験場においてPCR分析を実施した結果、タバココナジラミ（バイオタイプQ）であることが判明した。

(2) 本種は、一部の薬剤に対して感受性が低いため、特別な防除対策を講じるとともに、拡散防止に努める必要がある。

また、本種は「トマト黄化葉巻病」（TYLCV：本県では平成25年9月に初確認、平成25年9月13日付病虫害発生予察特殊報1号参照）や、「ウリ類の退緑黄化病」（CCYV：本県では未発生）を媒介するので、これらのウイルス性病害の発生にも注意する必要がある。

(3) 本種は低温に弱く、本県では野外越冬はできないと考えられるが、施設栽培では越冬し、発生が拡大する恐れがある。

4 防除対策

(1) 野菜苗、花苗の導入に際してはタバココナジラミの寄生がないことを確認する。

(2) 施設栽培の場合は、開口部に0.4mm以下の目合いの防虫ネットを張り、開放状態にしない。また、光反射マルチ資材や近紫外線除去フィルム等を設置し、成虫の侵入を防ぐ。

(3) 施設、ほ場の内外に黄色粘着板や黄色粘着テープを設置し成虫の早期発見と捕殺を行う。

(4) バイオタイプQは、一部の薬剤に対して感受性が低いとされているので、農薬については病虫害防除所や農業農村支援センター等に相談して使用する。また、**薬剤抵抗性の発達を防止するために同一系統の薬剤の連用を避ける。**

(5) 施設やほ場周辺の雑草や野良生えトマトは、タバココナジラミの発生源となるので適切に除去する。

(6) タバココナジラミが発生した場合は、収穫終了後、速やかに株を切断・抜根して完全に枯死させる。夏季（高温期）に栽培が終了する施設栽培の場合には、密閉して蒸し込み処理を行い（40℃、10日以上）、タバココナジラミを死滅させる。残渣は土中に埋めるか、焼却する。冬期栽培しない場合は、施設を開放して低温状態にする。

5 参考（タバココナジラミ バイオタイプQについて）

(1) 本種は、平成17年に国内で初確認され、長野県でも平成25年にトマト栽培施設で発生が確認されており、同年9月に特殊報を發出している（平成25年9月13日付病虫害発生予察特殊報2号）。

(2) 本種成虫は体長が約0.8mm、翅は白色で体は淡黄色。オンシツコナジラミと比較して静止時の翅

が背面で重ならず、腹部が見える（図2）。

- (3) 本種4齢幼虫は長さ0.8~1.0mm、体色は黄色~淡黄色。中央が厚く縁が薄い楕円形で、周囲に刺毛状の分泌物は目立たない（図3）。オンシツコナジラミの4齢幼虫は乳白色で厚みのある楕円形のコロッケ型で、周囲に刺毛状の分泌物がある（図4）。羽化後の抜殻で見分けるのが最も容易で、タバココナジラミに比べてオンシツコナジラミは厚みがある船底型となっている（図5、6）。
- (4) タバココナジラミのバイオタイプについては、形態上の差異は認められていないため、肉眼での識別は不可能である。
- (5) 成虫及び幼虫が葉裏に寄生して吸汁加害し、虫体からの分泌物と分泌物に発生するカビによる葉や果実の汚れ（すす病）、トマトの着色異常果の発生原因となる。



図1 トマトの着色不良



図2 タバココナジラミ成虫



図3 タバココナジラミ幼虫



図4 オンシツコナジラミ幼虫



図5 タバココナジラミの抜殻



図6 オンシツコナジラミの抜殻

長野県病害虫防除所 中南信担当
塩川正則（所長） 水谷俊英（担当）
TEL：0263-53-5642
FAX：0263-54-4508
E-mail bojo-y@pref.nagano.lg.jp